

ヨエル書とラオデキヤのセブンスデー・アドベンチスト教会 - その四

Jeff Pippenger

2025-12-07

四番

イザヤ書二十八章では、「エルサレムを支配する嘲る者たち」は「エフライムの酔いどれ」および「高ぶりの冠」として描かれている。「冠」は指導権を表し、「高ぶり」はサタン的な性質を表す。

酔いどれたちは、神の「栄光の冠」となる残りの者（「残余」）と対比される。というのも、後の雨の間に、主は十字架において「恵みの御国」を打ち立てられたことに象徴されるように、ご自身の「栄光の御国」を打ち立てられるからである。十字架における「恵みの御国」は、日曜法の時の「栄光の御国」を象徴している。後の雨は、十四万四千人の封印と生きている者の審判が始まった9/11に始まった。

私は、あらゆるものが目の前に迫る危機に鋭く目を向け、思いを張りつめているのを見た。イスラエルの罪はあらかじめ裁きに付されなければならない。すべての罪は聖所で告白されなければならない。そうしてこそ働きは進む。今すぐにそれをしなければならぬ。苦難の時の残りの者はこう叫ぶだろう。「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」

後の雨は清い者たちの上に降ろうとしている——そのときには皆、以前のようにそれを受けよう。

四人の天使が手を離すとき、キリストはご自分の御国を打ち立てられる。できる限りのことをしている者以外は、誰も後の雨を受けない。キリストは私たちを助けてくださる。すべての人は、神の恵みにより、イエスの血によって勝利者となり得る。天のすべてがこの働きに関心を寄せている。天使たちも関心を寄せている。Spalding and Magan, 3.

黙示録の四つの風は、イザヤによっても「東風の日にとどめられていた荒い風」として表されており、黙示録で四人の天使によって押しとどめられている「争いの四つの風」と同様である。ホワイト夫人は、この四つの風を、解き放たれようとする「怒れる馬」であり、「死と破壊」をもたらすものだとして述べている。四つの風は段階的に解き放たれ、9/11に始まり、日曜法で大きく激化し、人類の恩恵期間が閉じるときに完全に放たれる。

解放と束縛

神の奥義の成就を告げる第三の災いでもある第七のラツパは、9/11に預言的に鳴り響いた。イスラムが解き放たれ、その後は9/11後にジョージ・W・ブッシュによって預言的に抑え込まれた。イスラムの母、すなわちイシュマエルの母ハガルは、拘束と解放の象徴である。サラは自分の計らいでアブラハムに子をもうけさせるために彼女を解き放ったが、嫉妬のゆえに今度はサラが彼女を抑えつけ、ハガルは逃げ出した。やがて天使がハガルを

引きとどめ、戻るように告げた。イサクの誕生後もハガルとサラの確執は続き、ついにアブラハムはその奴隷の女を追い出し、彼女にもう一つの拘束を課すことになった。

イスラム教の四人の天使は、黙示録9章15節の391年と15日の預言の開始時に解き放たれ、その後、1840年8月11日に束縛された。

第六の御使いがラッパを吹いた。すると、私は、神の御前にある金の祭壇の四つの角から出る声を聞いた。その声は、ラッパを持つ第六の御使いに言った。「大いなるユーフラテス川に縛られている四人の御使いを解き放て。」すると、人の三分の一を殺すために、その時、その日、その月、その年のために備えられていた四人の御使いが解き放たれた。黙示録 9:13-15。

第三の災いのイスラムが9/11で攻撃するために解き放たれた後、ジョージ・W・ブッシュは世界的な対テロ戦争を開始し、イスラムを抑制した。イスラムの象徴であるイシュマエルに関する最初の言及は、イシュマエルの子孫がすべての人に敵対し、すべての人も彼らに敵対することを示している。

主の御使いは彼女に言った。「見よ、あなたは身ごもっており、男の子を産む。その名をイシュマエルと名づけなさい。主があなたの苦しみを聞かれたからである。彼は荒々しい人となり、その手はすべての人に逆らい、すべての人の手も彼に逆らう。彼はすべての兄弟たちに向かい合って住むであろう。」創世記16:11、12。

イスラム教は、世の終わりにおいて「すべての人の手」が敵対し、またイスラム教もすべての人に敵対する勢力であり、今日まさにそれが完全に成就しつつあるとおりである。予言の象徴としてのイスラム教の特別な役割は、世界大戦をもたらすことである。この主題は、エリヤと洗礼者ヨハネの物語によって裏づけられており、『黙示録』では「諸国を怒らせること」として表されている。

ここで述べられている「その苦難の時の始まり」は、災いが注ぎ始められる時を指すのではなく、キリストが聖所におられる間、災いが注がれる直前の短い期間を指す。その時、救いの働きが終結に向かう中で、地上には苦難が訪れ、諸国民は怒りをあらわにするが、第三の天使の働きを妨げないようになお抑えられている。その時、「後の雨」、すなわち主の御前からの潤いが臨み、第三の天使の大いなる叫びに力を与え、最後の七つの災いが注がれる時期に聖徒たちが堅く立つことができるように備える。Early Writings, 85。

後の雨が降っている「日々」には、ダニエル書に表されているように、キリストは栄光の御国を打ち立てる。

そして、これらの王たちの時代に、天の神は一つの王国を打ち立てられる。それは決して滅びることがなく、その王国がほかの民に渡されることもない。かえって、それはこれらすべての王国を打ち砕いて滅ぼし尽くし、とこしえに立つ。ダニエル書 2:44

キリストがその栄光の御国を打ち立てる「時」には、キリストの「栄光の冠」となる者たちは、「高ぶりの冠」をかぶる酒に酔う者たちと対照される。「板」に書き記され、明瞭にされることになっていたハバククの「幻」は、アドベンティズムの基礎的真理に関する歴史的証言を如実に描き出している。ハバククの証言では、ヨエルの二つの階級

——「高ぶり」か「栄光」か——が、信仰によって義とされる者たちと、高慢に心が高ぶる者たちとして表されている。第二章四節はこの二つの階級に言及しており、それはパリサイ人と取税人の古典的な例えと並行している。取税人は義とされて家に帰り、パリサイ人の「魂」は「正しくない」。それは「高ぶっている」からである。

見よ、彼の魂は高ぶっており、彼のうちに正しくない。しかし、義人は自分の信仰によって生きる。ハバクク書 2:4.

次の節でハバククは、心が高ぶっている階級を酔っている者と呼び、こうしてイザヤとハバククの酔漢を「高慢」と結びつけている。

さらにまた、酒のゆえに道を踏み外す彼は、高慢な者で家にとどまらず、よみのようにその欲望を広げ、死のようで飽くことを知らず、すべての国々を自分のもとに集め、すべての民を自分のもとにかき集める。ハバクク書 2:5.

ハバクク書のこれらの節は、ミラー派の歴史において成就しただけでなく、その成就是エレン・ホワイトとアドベンチスト運動の初期の先駆者たちの共通の主題でもあった。ミラー派の歴史において第四節に示された信仰によって義とされた者たちは、遅延の時と、バビロンの倒壊を告げる第二の天使のメッセージの到来を画した最初の失望の危機に耐えた人々であった。ミラー派は、その試練の歴史の中で、かつて契約の民とされた、歴史的にプロテスタントであった人々が、バビロンの娘たちとなってしまったことを理解した。そのプロテスタントはサルデスの教会に代表される人々で、彼らには品性と契約関係の象徴である「名」があり、契約の民を表してはいたが、彼らは死んでいた。

サルデスにある教会の御使いに書き記せ。神の七つの御霊と七つの星を持つ方がこう言われる。わたしはあなたの行いを知っている。あなたは生きているという名を持っているが、死んでいる。黙示録 3:1.

1844年の試みの過程は4月19日に始まり、その後10月22日に終わったが、その試みに失敗した者たちは高慢におごり高ぶった。そして、私たちが5節に続く諸節を読みさえすれば、人間の高慢の特質が、教皇的傲慢と自己高挙の例によってそこで示されていることがわかる。結びは20節で、そこで「主はその聖なる宮におられる。全地は主の御前に黙せよ」と宣言されている。

しかし、主はその聖なる宮におられる。全地よ、その御前に沈黙せよ。ハバクク書 2章20節.

ハバクク書2章2節は、1844年4月19日の第一の失望を示しており、この章は20節で終わるが、その20節は、主が突然ご自分の宮に来られた1844年10月22日を明確に指し示している。

1844年10月22日の四つの来臨（一行ずつ）

ダニエル書8章14節に示されている、聖所の清めのために私たちの大祭司としてキリストが至聖所に来られること、ダニエル書7章13節に示されている人の子が「日の老いたる者」のもとに来られること、そしてマラキが予告した主がご自分の宮に来られることは、いずれも同じ出来事の描写である。また、これはマタイ25章の十人の乙女

のたとえにおいてキリストが述べられた、花婿が婚礼に来ることによっても表されている。『大争闘』426ページ。

第三節と第四節は、第二節から第二十節にわたる試練の過程、すなわち1844年4月19日から同年10月22日までの試練の過程で生み出される二つの階級を明らかにしている。第四節から第十九節は教皇権を取り上げているが、第十四節だけは、9/11における黙示録第十八章の天使の降臨に続く歴史を扱っている。

地は主の栄光を知る知識で満たされる。海が水で覆われているように。ハバクク書2:14。

ミラー派の歴史における第二の天使による試練の過程で、二つの階級の礼拝者が形成され、その後、1844年10月22日の危機においてそれが明らかになった。この箇所における悪しき者の性格は教皇権の性格であり、その試練の期間に、忠実なミラー派は第二の天使のメッセージに一致して、プロテスタント教会はミラー派のメッセージを拒絶したことによってローマの娘たちとなったと宣言するに至った。4月19日に始まり10月22日に終わる間に展開したその論争の中で、品性は、ベルシャザルのようにバビロンの酒を高慢に飲む者としてか、あるいはベルシャザルの前に立ったダニエルのように信仰によって義と認められた者としてか、明らかにされた。その論争こそが、第三の天使のメッセージに結びつく永遠の現実へと世界を目覚めさせるドラマが展開する場である。酔った者と義とされた者の対比という背景は、世界がいかにしてその争点について啓明されるのかという議論の文脈に置かれており、「海を覆う水のように、地は主の栄光を知る知識で満たされるからである」。その啓明は9/11に始まった。

ハバクク書第2章に描かれている歴史の結末において、主は1844年10月22日に突然ご自分の神殿に来られた。これは、主がパルモニとしてダニエル書8章14節で示された預言の成就であった。

パルモニ

聖書暦の第七の月の十日、すなわち1844年には10月22日に当たるその日に、ハバクク書2章20節が成就し、天の聖所におけるキリストの働きの経緯の変化を示すその「章と節」に、象徴的な数字「220」を見ることができる。十四万四千の預言的特徴は、彼らが小羊が行かれるところならどこへでも従う者たちであるということである。キリストに従うとは、彼の御言葉に従うことを意味する。

御言葉において、数「220」は神性と人性の結合を象徴的に表しており、その日にキリストが始められた働きこそ、ご自身の神性を人性と結び合わせる働きであった。1844年の第十の月の第二十二日、すなわち象徴的には二十二掛ける十が「220」（ $22 \times 10 = 220$ ）となる日、言い換えれば象徴的に「220」に相当するまさにその日に、ハバクク「2:20」が成就した。キリストが聖所から至聖所へと移られて調査審判を開始されたのである。

「『不思議な数』と呼ばれるパルモニは、アドベンチズムの中核をなす『問答』の中に位置しており、ほとんどのアドベンチストはその真理をまったく知らない。」

再臨信仰の土台であり中心の柱として、何よりも重んじられてきた聖句は、「二千三百日まで、そのとき、聖所は清められる。」という宣言であった。〔ダニエル書 8:14〕 『大争闘』 409ページ。

ダニエル書8章13節と14節は、13節の問いに続いて14節の答えが示されています。ヘブライ語の「パルモニ」は13節で「ある聖者」と訳されており、キリストのその特別な名は「驚くべき数える者」または「秘事を数える者」を意味します。

エレン・ホワイトが、十四節がアドベンティズムの中心的な柱であり土台であると指摘するとき、彼女はこれら二節の問答に神的な強調を置いており、それは「驚くべき数え手」としてのキリストを主要な基準点とすることを求めている。ホワイト夫人は、どの聖句においてもキリストを中心的真理として見ることの重要性を繰り返し強調しており、十三節と十四節には「ある聖者」すなわちパルモニとしてのキリストの直接の顕現がある。

1863年にアドベンチズムがレビ記二十六章の「七つの時」を退けたとき、彼らはパルモニに目を閉ざした。というのも、問答の預言的構造は、モーセの「七つの時」とダニエルの「二千三百の日」の関係に基づいているからである。モーセの「七つの時」（すなわち二千五百年）とダニエルの「二千三百の夕と朝」（すなわち二千三百年）との預言的關係は、数で表される時間によって確立されており、アドベンチズムの中心的な柱であるその問答のまさに中心には、驚くべき数え手がいる。ヨセフスの著作を読んだことのある人は、神によって創造された二つの特別なものを指摘する彼の論理的な議論を思い出すかもしれない。一つはヘブライ語で、もう一つは測定可能な時間であり、それはひいては数学を必要とする。

13節は「どれくらいのあいだか（いつまでか）」と問うている。この節は「いつか」とは問わず、「どれくらいのあいだか」と問うている。問いが期間についてのものか（どれくらいのあいだか）、それとも時点についてのものか（いつか）を見分けることは、正しく理解するうえで不可欠である。14節のその問いへの答えは、ある時点を指し示すのか、あるいはある期間を指し示すのか、またはその両方である可能性もある。しかし答えがいかなるものであれ、それは13節の問いという文脈の中に置かれなければならない。言葉を正しく分けること、すなわち14節の答えを正しく理解するためには、問いの文脈を正しく理解することが必要である。それは「いつ」なのか、それとも「そのとき」なのか。

エフライムの酔いどれどもは、14節が時間の一点を指していると言明に教え、それを1844年10月22日だと特定するが、その際には先ほど『The Great Controversy』から引用した箇所にも言及することも十分ありうる。しかし、神の御言葉は決して変わらず、決して失敗しない。「どれくらいの間か」という問いが示しているのは時点ではなく、期間である。1844年10月22日は調査審判の期間の始まりであり、その働きに伴う真理は永遠の福音を表しており、始まった日付そのものよりはるかに重要である。

ヘブライ語の文法は明確であり、その同じ意味が欽定訳聖書にも訳されている。文法はその問いを明らかに期間の文脈に置いているだけでなく、「いつまで」という問い自体が聖書の預言における象徴である。象徴としての「いつまで」という問いが、9/11から日曜法に至る歴史を表していることは、いくつかの証拠によって立証できる。私たちはまず「

いつまで」という象徴を考察し、その後パルモニとヨエルに戻ることにする。

いつまで？ アイザイア・シックス

イザヤ書6章3節で、天使たちは地は神の栄光で満ちていると宣言している。

互いに呼び交わして言った。「聖なる、聖なる、聖なるかな、万軍の主。全地はその栄光に満ちている。」イザヤ書 6:3.

ホワイト姉妹は、黙示録18章の天使の降臨を、第3節の天使たちと結びつけている。

彼ら〔天使たち〕は、やがて全地が御栄光で満たされる未来を見通し、美しい詠唱のうちに勝利の賛歌が互いにこだまし合い、「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、万軍の主」と響き渡る。Review and Herald, 1896年12月22日.

イザヤは9/11にあって、見ようとも聞こうともしないラオデキアの民に9/11のメッセージを「いつまで」伝え続けなければならないのかと問う。彼は、都市が打ち壊されるまで忍耐しなければならないと告げられる。そして都市の破壊は、国家的背教に続いて国家的破滅が起こる日曜法の時に始まる。

そこで私は言った、「主よ、いつまでですか。」彼は答えられた、「町々は住む者がなく荒れ果て、家々には人がいなくなり、地は徹底的に荒廃するまで。主が人々を遠くへ移し、この国のただ中に大いなる離散が起こるまで。しかしなお、その中に十分の一が残り、それは戻って来るが、また滅ぼし尽くされる。テレビンの木や榿の木が、葉を落としても切り株が残るように、その聖なる種がその切り株となる。」イザヤ書 6:11-13

9/11に、地が神の栄光に照らされたとき、イザヤは「後の雨」のメッセージを告げるために油注がれ、心の鈍くなった人々に9/11のメッセージをどれほどの間伝え続けるべきかと「いつまで」と尋ねる。答えは「日曜法」までであり、そのとき「地のただ中に大いなる見捨てがある」。この「大いなる見捨て」は、イザヤ書22章でシェブナとして表されているラオデキア的アドベンチズムによって引き起こされる。

見よ、主は力づくであなたを捕らえて連れ去り、必ずあなたを包む。主は必ず、あなたを球のように激しく振り回して、広い国へ投げ飛ばす。そこであなたは死に、そこであなたの栄光の戦車は、あなたの主の家の恥となる。わたしはあなたをその地位から追い払い、彼はあなたをその職から引き降ろす。イザヤ書 22:17-19

ラオデキア的アドベンチズムは、日曜法のときに真理を捨て、ダニエル書11章41節に示されているように、そこで「打ち倒される」。

彼はまた美しい地に侵入し、多くの国々が打ち倒される。しかし、エドムとモアブ、そしてアンモンの子らの主だった者たちは、彼の手から逃れる。ダニエル書 11:41

イザヤが「いつまでですか」と尋ねると、彼は、ダニエル書11章41節の「多くの者」が「打ち倒され」、彼らが安息日と神を捨てるときである日曜法の時まで、アドベンチズムにこのメッセージを伝えるよう告げられる。そのとき彼らは、聖書のすべての書が出会い終わりに至る書である黙示録に描かれているように、主の口から吐き出される。そこ

ではまた、イザヤ書22章のシェブナが「激しく」、「大きな国へ球のように」投げ飛ばされ、「遠くへ」「移される」とある。

その時期には、「十分の一」（すなわち什一）として表された残りの者が「帰って来る」。その箇所では、彼らは、葉が落とされても「本体」が残る木にたとえられている。「葉」は予言的象徴において信仰の表明を表す。アドベンチズムが日曜法に至り、神の安息日の代わりに週の初めの日を受け入れるとき、彼らはその「表明」という葉を投げ捨て、もはや神の第七日安息日を堅持していると主張しなくなる。

いちじくの木が呪われたことは、行為によって示されたたとえであった。キリストの目の前で見せかけの葉を誇示していたその実を結ばない木は、ユダヤ民族を象徴していた。救い主は、イスラエルの滅びの原因とその確実性を弟子たちに明らかにしようとされた。この目的のために、彼はその木に道徳的な性格を持たせ、神の真理を明らかにするものとされた。ユダヤ人は他のすべての民族と一線を画し、神への忠誠を公言していた。彼らは神から特別な恵みを受け、他のどの民よりも義であると主張した。だが彼らは、世を愛する心と利得への貪欲によって墮落していた。彼らは自分たちの知識を誇ったが、神が求めておられることには無知で、偽善に満ちていた。実を結ばない木のように、彼らは見せかけの枝を高々と広げ、見た目には繁茂し、目に美しく映ったが、もたらしたのは「葉ばかり」であった。壮麗な神殿、聖なる祭壇、冠を戴いた祭司たち、そして荘厳な儀式を備えたユダヤ教は、外見こそ確かに美しかったが、謙遜と愛と慈しみが欠けていた。

「いちじく園の木々はみな実を結んでいなかった。しかし、葉のない木々は期待を抱かせず、失望も引き起こさなかった。これらの木々は異邦人を表していた。彼らはユダヤ人と同様に敬虔さを欠いていたが、神に仕えたと公言してはいなかった。彼らは善を誇る大げさな見せかけもしなかった。彼らは神の御業と御道に盲目であった。彼らにとって、いちじくの時はまだ来ていなかった。彼らはなお、自分たちに光と希望をもたらす日を待っていた。神からより大きな祝福を受けていたユダヤ人は、これらの賜物を濫用した責任を問われた。彼らが誇っていた特権は、かえって彼らの罪責を増すばかりであった。」『時代の希望』582、583。

日曜法において、彼らが死の契約のしるしを受け入れ、いのちの契約の印を拒むため、神の契約の民であるというラオデキア的アドベンチズムの告白は消え去る。彼らはその後、信仰告白の葉を投げ捨て、目に示されるのはイザヤによって表される残りの者である。彼らは9/11に古き道に「立ち帰り」、（イザヤが）自らの墮落した経験に気づいたとき塵にまでへりくだらされ、その後、祭壇から取った炭で清められた。ホワイト夫人は、祭壇の炭は清めを表すと私たちに教えているが、清めとは、炭がイザヤの唇に触れることによって成し遂げられることそのものである。

燃える炭は清めの象徴である。それが唇に触れれば、唇から汚れた言葉が出ることはない。また、その燃える炭は、主のしもべたちの働きの効力をも象徴している。

Review and Herald, 1888年10月16日

終わりの日に祭壇から地に投げ落とされる「炭」とは、黙示録8章の最初の五節で第七にして最後の封印が開かれるときに投げ込まれる炭のことである。イザヤがそうであったように、十四万四千人もその炭が唇に触れることによって清められる。しかし、その「炭」

とはメッセージである。彼らが御使いの手から書を取り、食べるとき、それが彼らの唇に触れる。

彼らをあなたの真理によって聖めてください。あなたのみことばは真理です。ヨハネ 17:17.

「帰る」者、すなわち残り（残余）となる者たちは、櫨の木とティールの木として表されている。そして、キリストが「木に道徳的資質を与え、それを神の真理の解説者とされた」のと同様に、イザヤ書の木々には「実体」によって表される「道徳的資質」が内在している。「告白の葉」にすぎなかった者たちが振り落とされることでさえ、その「実体」は木々にとどまる。「聖なる種」は「実体」であり、キリストは預言の「聖なる種」である。第六章で残りとして、またイザヤ自身によっても表されているそれらの木々は人、すなわち人類を表し、「聖なる種」は神性を表す。ゆえに、イザヤ書六章は、9/11から日曜法に至るまでのアドベンティズムの浄化を示しており、その預言的歴史に関してイザヤが与える詳細はすべて、彼の「いつまでか」という問いによって表されている。イザヤにとって「いつまでか」への答えは、9/11から日曜法までであった。

どのくらいの期間？ 1840年～1844年

1840年8月11日は9/11の雛形であり、1840年8月11日から1844年10月22日に至る予言的な歴史の中で、エリヤとイゼベルの預言者たちとのカルメル山での戦いが起こった。最終的に、バアルの預言者たちは偽預言者であることが示され、エリヤによって処刑されたが、対決の冒頭にエリヤは「いつまであなたがたは二つの意見の間でためらうのか」と問いかけた。

エリヤはすべての民のところに来て言った。「いつまで二つの意見の間でためらっているのか。もし主が神であるなら、主に従え。もしバアルが神であるなら、彼に従え。」しかし民は彼に一言も答えなかった。そこでエリヤは民に言った。「主の預言者として残っているのは、私、ただ私ひとりだ。だがバアルの預言者は四百五十人いる。」列王記上 18章21、22節。

エリヤは1840年8月11日に立ち、その世代にミラー派のメッセージは真実か、それとも偽りかと問いかけている。イザヤ書6章がそうであったように、それはラオデキアへのもう一つのメッセージである。

ウィリアム・ミラーが宣べ伝えた真理を受け入れるように、何千人もの人々が導かれ、エリヤの霊と力をもってそのメッセージを宣べ伝えるために、神のしもべたちが起こされた。イエスの先駆けであるヨハネのように、この厳粛なメッセージを説いた人々は、斧を木の根元に置き、人々に悔い改めにふさわしい実を結ぶよう呼びかけねばならないと感じた。彼らの証言は、教会を目覚めさせて強く感化し、その真の性格を明らかにするようのものであった。そして、やがて来る怒りから逃れよという厳粛な警告が響かされると、教会に連なっていた多くの者がその癒しのメッセージを受け入れ、自らの背信を悟り、悔い改めの苦い涙と魂の深い苦悩をもって、神の前にへりくだった。そして神の御霊が彼らの上にとどまると、彼らもまた「神を恐れ、その栄光を彼に帰せよ。彼の裁きの時が来たからである」という叫びをともに響かせた。『初期の著作』233頁。

1840年から1844年にかけての試練の歴史において、エリヤのメッセージを退けたプロテスタントはローマの娘たちとなり、プロテスタンティズムの外套をミラー派アドベンティズムに譲り渡した。イザヤとエリヤによって、私たちは二人の証人を持ち、「いつまでか」という問いが、9/11に始まり日曜法で終わる歴史の象徴であることが証しされている。ミラー派の歴史においては、1840年8月11日は9/11に一致し、1844年10月22日は日曜法に一致する。天から火が下ってエリヤの供え物を焼き尽くしたとき、十二の石はその供え物とともに皆、輝いた。こうして、輝く石として表象される旗印として十四万四千が印づけられた。その後偽預言者たちはエリヤに殺されたが、同様に、偽預言者であるアメリカ合衆国も、日曜法において第六の王国として打ち倒される。

イザヤ書6章は、9/11から日曜法に至るまで、神の民の間で行われる試験・精錬・清めの過程を強調している。エリヤは神の民のラオデキア的態度に言及するとともに、真の預言者と偽の預言者、ひいては真のメッセージと偽のメッセージを区別する証拠も提示している。したがって、1840年8月11日に始まり1844年10月22日に終わる預言的な試練がサルディス期のプロテスタントに課され、カルメル山の火が人々を二つの階級に分けたのと同様に、1844年にも二つの階級が現れた。試練の過程における一方の階級は、まもなく契約の民の地位を失う者たちであり、もう一方は、神が1844年10月22日に契約を結ばれるミラー派アドベンティズムであった。試練と分離の時期はぶどう園の物語であり、サルディス期のプロテスタントが背教的プロテスタントとしての役割を果たし始めたのと同じ時点で、ミラー派アドベンティズムが真の預言者であることが示された。バアルの預言者たちが偽りであることが暴露されたのと同様に、かつて契約の民であった者たちも暴露され、ミラー派によってローマの娘と認定された。カルメル山の物語と、その歴史がミラー派の時代に成就した事実は、「いつまでですか」という問いが9/11から日曜法に至る期間の象徴であるというイザヤ書6章の主張に対する第二の証しを与えている。

「『アブラハム、イサク、イスラエルの神、主よ』と預言者は嘆願した。『きょう、あなたこそイスラエルにおける神であり、私があなたのしもべであり、私がこれらすべてのことをあなたの御言葉によって行ったことが知られますように。主よ、私に答えてください、私に答えてください。この民が、あなたこそ主なる神であり、あなたが彼らの心を再びあなたのもとへ向けられたことを知るように。』」

その荘厳さゆえに押し掛かる沈黙が、すべてを包み込んでいる。バアルの祭司たちは恐怖におののく。自らの罪を自覚し、彼らは速やかな裁きを覚悟する。

エリヤの祈りが終わるやいなや、まばゆい稲妻の閃光のような炎が天から築かれた祭壇の上に降り下り、いけにえを焼き尽くし、溝の水をなめ尽くし、祭壇の石までも焼き尽くした。炎のまばゆさは山を照らし、群衆の目をくらませた。下の谷では、上の者たちの動きを固唾をのんで見守っていた多くの人々にも、火が降るのがはっきりと見え、皆がその光景に驚嘆した。それは、紅海においてイスラエルの民をエジプトの軍勢から隔てた火の柱に似ていた。

山の上の民は、見えざる神の御前に畏敬の念に打たれてひれ伏した。彼らは天から下された火を、これ以上直視することをあえてしない。自分たちも焼き尽くされるのではないかと恐れ、また、自分たちが忠誠を負う祖先の神としてエリヤの神を認めなければならぬ義務があることを思い知らされて、声を一つにして叫んだ。「主こそ神

である。主こそ神である。」その叫びは驚くほど明瞭に山に響き渡り、下の平原にまでこだました。ついにイスラエルは目を覚まし、欺きから解かれ、悔い改めた。ついに民は、自分たちがどれほど神を辱めてきたかを悟った。真の神が求められる理にかなった礼拝と対比されて、バアル礼拝の本質が余すところなく明らかになった。露と雨を差し止め、彼らがその御名を告白するに至るまでそうされたことのうちに、民は神の義とあわれみを認めた。今や彼らは、エリヤの神がすべての偶像にまさる方であることを認めるに至った。『預言者と王たち』153頁。

どのくらい？モーセ

「『いつまで』という象徴的な問い」が預言の言葉の中で初めて提起されるのは、モーセの時代にエジプト人に下った第八の災いにおいてである。第八の災いは「いなご」（イスラムの象徴）であり、それは「東風」（イスラムの象徴）によってもたらされる。

モーセとアロンはファラオのもとに入り、彼に言った。「ヘブル人の神、主はこう言われる。いつまでわたしの前にへりくだることを拒むのか。わたしの民を去らせよ。彼らがわたしに仕えることができるように。しかし、もしあなたがわたしの民を去らせることを拒むなら、見よ、明日、わたしはいなごをあなたの領土に来させる。いなごは地の面を覆い、地が見えなくなるほどになり、雹を免れてあなたに残っているものを食い尽くし、野であなたのために生えているすべての木を食い尽くす。また、いなごはあなたの家、あなたのすべての家臣の家、そしてエジプト人のすべての家を満たすようになる。それほどのものを、あなたの父祖もその父祖も、この地にいたその日から今日に至るまで見たことがない。」そして彼は身を翻し、ファラオのもとから出て行った。

ファラオの家臣たちはファラオに言った。「いつまでこの男は私たちの妨げとなるのですか。男たちを行かせ、彼らの神である主に仕えさせてください。エジプトが滅びかけていることを、あなたはまだ知らないのですか。」

モーセとアロンは再びファラオのもとに連れて来られた。彼は彼らに言った。「行って、あなたがたの神、主に仕えよ。しかし、誰が行くのか。」

モーセは言った。「私たちは若い者も年寄りも、息子たちも娘たちも、羊の群れも牛の群れも連れて行きます。主に祭りを行わなければならないからです。」

彼は彼らに言った。「わたしがあなたがたとあなたがたの幼子たちを去らせるようなことがあるなら、そのときは主があなたがたとともにおられるがよい。よく用心せよ。あなたがたの前には災いがあるからだ。そんなことにはならぬ。今は男たちだけが行って主に仕えよ。あなたがたが望んだのはそのことだ。」そして彼らはファラオの前から追い出された。

そして主はモーセに言われた。「いなごのために、あなたの手をエジプトの地の上に伸ばせ。そうすれば、彼らはエジプトの地に上って来て、その地のあらゆる草、すなわち雹が残したのものまでも食い尽くすであろう。」モーセは自分の杖をエジプトの地の上に伸ばした。主はその日じゅう、また夜通し、東風をその地に吹かせられた。朝になると、その東風がいなごを運んできた。いなごはエジプトの全土に上って行き、エジプトの全域にとどまった。それは非常に甚だしいもので、その前にもそのような

なごはなく、その後にもそのようなものはないであろう。彼らは地の全面を覆い、地は暗くなった。彼らはその地のあらゆる草、また雷が残しておいた木の実をことごとく食い尽くした。こうしてエジプトの全地にわたり、木にも野の草にも青いものは何一つ残らなかった。

そこでファラオは急いでモーセとアロンを呼び寄せ、言った。「私はあなたがたの神である主に対して、またあなたがたに対して罪を犯した。どうかこの一度だけ私の罪を赦し、あなたがたの神である主に願って、この死だけは私から取り除いてくださるようしてくれ。」そして彼はファラオのもとを去り、主に祈り求めた。主は非常に強い西風を起し、その風がいなごを運び去って紅海に投げ込んだ。エジプト全土のどこにも、いなごは一匹も残らなかった。出エジプト記 10:3-19。

まず「ヘブライ人の主なる神」はこう問う。「いつまで、あなたはわたしの前にへりくだることを拒むのか」。そしてその後、ファラオの家臣たちは再びファラオに問う。「いつまでこの男は我々にとって罫であり続けるのか」。その問いは第八の災いの最中に発せられ、いくつかの理由から9/11と符合する。第十の災いは初子の殺害であり、それは十字架と符合する。その後には紅海での失望が続き、靈感はそれを十字架における弟子たちの失望と一致させており、それは1844年のミラー派の大失望と一致する。これら三つの証しはすべて日曜法と符合する。第十の災いは日曜法であり、その二つ前の第八の災いでは「東風」によって「いなご」がもたらされた。「いなご」は全地を満たした。ちょうど今日、イスラムが強制的な移民を通してその暗闇を広げ、全世界を揺り動かしているのと同じである。「砂漠のいなご」のラテン名は「*locusta migratoria*」であり、自然界における「移動」という現象が型として示している、移民を通じたイスラムの拡大を表している。

第九の災いは、手で触れることのできる暗闇であった。

そして主はモーセに言われた。「天に向かってあなたの手を伸ばし、エジプトの地に暗闇があるようにせよ。触れるほどの暗闇であるように。」モーセが天に向かって手を伸ばすと、エジプト全土は三日のあいだ濃い暗闇に覆われた。彼らは互いの姿を見ることができず、三日のあいだだれも自分の場所から立ち上がることもなかった。しかしイスラエルの子らは皆、自分たちの住まいには光があった。出エジプト記 10:21-23。

カルメル山とエリヤによって表される「いつまで」という象徴においては、天から火が降るときに区別が明らかになる。エリヤの神は、バアルにはできないことをなされた。ミラー派の歴史においては、墮落したサルデス的プロテスタンティズムとミラー派アドベンチズムとの間に区別が設けられた。モーセの場合、その区別は闇か光かであった。ヘブライ人の家々には光があった。さらにイザヤは、モーセの系統にあって光のない者たち、すなわちエリヤによって滅ぼされる者たち、そしてミラー派の時代にプロテスタンティズムの外套を失う者たちは、「確かに聞いても悟らず、確かに見ても認めない」ような「民」であることを知らせている。ついで、この民について次の宣告がなされる。「この民の心を肥え太らせ、その耳を重くし、その目を閉ざせ。彼らとその目で見、耳で聞き、心で悟り、立ち返っていやされることのないように。」

働くことはいとわれないが、聞こうとしない者たちに説教せよという任務に圧倒されている。イザヤは「それから言った、『主よ、いつまでですか』」。

エジプトの十の災いの最後の三つは、9/11から日曜法へと至る三段階の証しとなっている。1840年8月11日に第一天使の使命は力を受け、1844年4月19日に第二天使が到来し、同年8月12日から17日のエクセター野営集会で力を受け、そして1844年10月22日に第三天使が到来した。第三天使は日曜法と一致しており、それゆえ三段階の過程を示している。第一と第二がなければ第三はありえないからである。

「第一と第二のメッセージは1843年と1844年に与えられ、私たちは今や第三のメッセージの宣布のもとにある。しかし、三つすべてのメッセージは今なお宣べ伝えられなければならない。真理を求める人々にそれらが繰り返され語られることは、今もかつてと同様に不可欠である。私たちは筆と言葉をもって、その順序と、私たちを第三天使のメッセージへと導く預言の適用を示しつつ、その宣言を響かせねばならない。第一と第二なしに第三はありえない。出版物や説教において、預言的歴史の流れの中で、すでに起こった事柄とこれから起こる事柄を示しながら、これらのメッセージを世界に与えるのである。」『選ばれたメッセージ』第2巻、104、105頁。

エジプトの第十の災いは、靈感によって十字架とそれに続く失望と結び付けられてきた。ゆえに第十の災いは第三のメッセージであり、預言的な必然から、その前には第一と第二のメッセージが先行していなければならない。9/11に、主はファラオに「いつまで」と問われ、その直後にファラオのしもべたちも「いつまで」と問うた。モーセが神の「いつまで」という問いをファラオに伝え、しもべたちがモーセの問いをファラオに繰り返す直前に、モーセは転換点を「彼は身を翻し、ファラオのもとを去った」と記している。出エジプト記10章6節。

9/11は預言的な転換点であり、それはモーセが東風によりイナゴの災いを下したときに象徴された。

国々と教会の歴史には、転換点となる時期がある。神の摂理により、こうしたさまざまな危機が訪れるとき、その時のための光が与えられる。バイブル・エコー、1895年8月26日。

次の災いは、人がどの立場にあるかによって、闇か光をもたらした。9/11は「諸国と教会の歴史における転換点」であった。その時点で神の民は立ち帰り、古き道を歩むようにと召されたが、彼らはそこを歩むことを拒み、ラッパの音にも耳を傾けなかった。エリヤの後に、闇と光の分離が成し遂げられ、モーセは「いつまでか」と問うた。彼女はその箇所ですらに次のように述べている：

諸国と教会の歴史には、転換点となる時期がある。神の摂理により、これらのさまざまな危機が到来すると、その時のための光が与えられる。それが受け入れられれば霊的前進がもたらされ、拒まれれば霊的衰退と難破が後を追う。Bible Echo, 1895年8月26日。

「how long」については、次回の記事で引き続き取り上げます。

1842年5月、マサチューセッツ州ボストンで総会が招集された。この会の冒頭で、ヘイヴァリルのチャールズ・フィッチおよびアポロス・ヘール兄弟が、布に描いたダニエルとヨハネの図解した預言を、成就を示す預言の数とともに提示した。会議の前で自身の図表を用いて説明しながら、フィッチ兄弟は言った。これらの預言を調べているうちに、ここに示しているようなものを作ることができれば、主題が簡明になり、聴衆に提示するのが自分にとって容易になるだろうと思ったのだ、と。ここに私たちの歩む道に、いっそうの光が与えられた。これらの兄弟たちは、2468年前に主がハバククに幻のうちに示して言われたこと、すなわち「幻を書き記し、板の上に明瞭にせよ。読む者が走りながらでもそれを読めるように。というのは、その幻はなお定めの時のためだからである」を、まさに行っていたのである。ハバクク書 2:2。

この件についていくらか議論した後、このようなものを三百枚石版印刷することが満場一致で可決され、ほどなく実行された。これらは「43年の図表」と呼ばれた。これは非常に重要な会議であった。ジョセフ・ベイツ『自伝』、263頁。

私は、1843年の図表が主の御手によって導かれ、変更してはならないこと、また、数字は主が望まれたとおりであったこと、さらに、御手がある上を覆っていくつかの数字の中にある一つの誤りを隠し、御手が取り去られるまで誰にもそれが見えなかったことを見た。『初期の著作』74頁。

「『原初の信仰』の上に立っていた再臨運動の講師たちおよび諸紙の一致した証言は、あの図表の出版がハバクク2:2, 3の成就であったということであった。もしその図表が預言の主題であったならば（そしてこれを否定する者は原初の信仰を離れるのであるが）、それに続いて、紀元前457年を2300日の起算年であることになる。1843年が最初に公表された時として必要であったのは、『その幻』が『なお遅れる』ため、すなわち遅延の時があるためであり、その間に、乙女たちの一団は、真夜中の叫びによって呼び覚まされる直前に、時に関するこの大いなる主題について眠り、まどろむことになっていたのである。」Second Advent Review and Sabbath Herald, Volume I, Number 2, James White.